第８期インターシップ最終報告

平成 23 年 8 月 4 日

ニックネーム：　チェマン

1. 目的

今回のインターンシップ研修における私の目的は､｢生涯過ごしてきた福島県に少しでも貢献したい｣というものである。

３月 11 日に大震災が発生してから、福島県は県全体で復興・復旧に取り組んできた。その中で、自分も長らく生活してきた福島県に何か貢献できないか試行錯誤していたところ、本インターンシップの情報を伺い参加を希望した。

２週間という短期間の中でも、自分は福島県に何が出来るのか、また今後いわき市でも活かせる取り組みはないか、本インターンシップを通して考えていきたい。

2. 研修内容

（1）会津市内の仮設住宅訪問（カラオケ巡回バス）

（2）観光協会の業務補助・東山温泉旅館「原瀧」における大熊町住民への昼食提供

（3）山際シェフの料理販売（郡山）

（1）会津市内の仮設住宅訪問（カラオケ巡回バス）

期間：７/26～７/28、8/2

・企画に対する住民の方々の反応

当初はほとんどの仮設住宅に自治会や取りまとめ役が存在せず、どなたにお話すれば良いか分からなかった。また、話を聞いていただけても「カラオケ」という単語に拒否反応を示す人も少なくなかった。さらに、避難所から仮設住宅に移ってきたばかりで、カラオケ巡回バスのような企画を行うにはまだ「時期尚早」だとおっしゃる方もいた。しかし、その反面移り住んだばかりであり交流がまだ少ないという意味からぜひカラオケ巡回バスを行いたいという方もいて、住民の方々の意見も様々だと思った。

・仮設住宅の現状

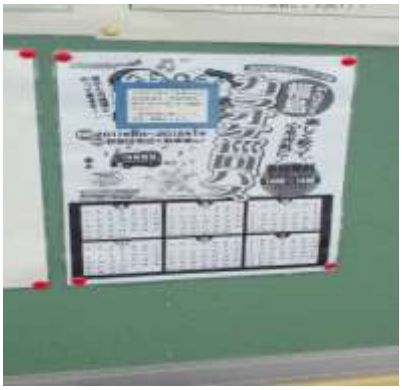
研修中、徐々に各仮設住宅に自治会が立ち上がり始め、お話もスムーズに進むようになった。しかしながら、予約を受けるまでには至らず、多くの予約を受けるにはもう少し時間がかかると感じた。

各仮設住宅を訪れてみて、生活の充実度に差があると感じた。まず、自治会があるかないかはすごく大きい｡自治会のない仮設住宅では､情報が住民の方々に行き渡らず困っているとのことだった。また立地条件も生活の充実度の差を生み出している。仮設住宅の近くにスーパーや駅がある（河東学園前など）反

面、周りは住宅街でスーパーが近くになく生活に困っているところ（松永近隣公園など）も存在しており、それらを平等にするための対策が必要だと実感した。

さらに、少数ではあっても１人暮らしで住民と馴染めていないご老人の方々がおりその対応が急がれている。（役場・自治会の現状把握、見回り）

説明の途中でつき返されることもしばしばあり、ものごとを的確に伝え、相手に理解してもらうのは大変であり、内容を理解してもらうためにはまずは自分がそれを理解していなければならないと感じた。



・会津若松市の仮設住宅といわき市の仮設住宅の比較

両者とも、遠出をする際の交通手段に困っているとのことだった。両者の違いは、仮設住宅自体の建物に差が有るか無いかということだった。会津の仮設住宅では、立地条件に差はあったものの、その建物はすべて同じものだった。しかし、いわきの仮設住宅は、建物が全て同じではなく、木製の建物もあればプレハブのような仮設住宅もあった。これは、委託された建設業者の違いによるものである。住民の間で、この差に不満が生まれないか危惧されると考えられる。

第８期インターシップ最終報告

平成 23 年 8 月 4 日

ニックネーム：　チェマン

（2）東山観光協会の業務補助・東山温泉旅館「原瀧」における大熊町住民への昼食提供

期間：7/29、8/1

【スケジュール】

10：00　東山温泉協会にて
各旅館の避難者受入人数を集計（電話）
周辺の清掃

11：30　原瀧にて
大熊町の方々への昼食の配膳

14：00　東山温泉協会にて
事務作業、各旅館への資料配り

16：00　終了

・ 東山温泉観光協会

東山温泉協会では、３人の職員の方で運営しており規模はごく小さい。しかしながら、観光客への対応・夏祭りの準備・窓口対応など行わなければならない業務はとても多い。会長の平出さんも「観光協会に関係ないことも含めて、ひっきりなしに電話が来るので対応が大変だ」とおっしゃっていて、その忙しさがうかがえる。

東山温泉観光協会は、前述したとおり規模が小さく裏方の仕事が多い。その中で、あれだけの業務をこなすのは容易なことではないが、職員の皆さんは的確にその業務をこなしていた。それを拝見して、仕事において重要なのは規模の大きさではなくどれだけ仕事に真剣に向き合えるかだと感じた。

第８期インターシップ最終報告

平成 23 年 8 月 4 日

ニックネーム：　チェマン

・ 旅館「原瀧」

原瀧には現在も大熊町からの避難者が滞在しているが、昼食を配膳しながらその数は日々減少していっていると感じた。原瀧にも、寝たきりのご老人が若干名いるようで仮設住宅への移動が困難であるということだった。

原瀧のスタッフの方々は、３ヶ月の日々の中で大熊町民の方々と家族のように仲が良くなっていた。また、大熊町民の方々の顔・名前・家族構成を完璧に把握し、いくつおかずが必要か瞬時に判断していた。原瀧のスタッフの方々を見ていて、大熊町の方々を全力でサポートしようという気持ちが強く伝わってきた。

・ 旅館にいる大熊町町民の心境

旅館にいる大熊町の方々の心境は、仮設・借り上げ住宅に早く移りたいという人々と出来るだけ長く旅館で過ごしたいという人々の 2 つに分かれた。早く移りたいという人々は､｢旅館のスタッフの方々は親切にしてくれるがやはり不便だと｣おっしゃっており、出来るだけ長く旅館で過ごしたいという人々は、「仮設住宅に移り住むとすべて自分でやらなければいけないから大変」とおっしゃっていた。徐々に仮設住宅に移り住んでいる方が増加している中で、前者には一刻も早い移動を、後者には仮設に移動した後のケアが必要であると感じた。

・ 東山温泉の現状

東山温泉では､震災後宿泊客が減少している｡実際に周辺を観察していても、宿泊客らしき人はほとんど見受けられず、これから宿泊客を元通りにするにはこれまで以上に東山温泉を PR していく必要があると思った。

（3）山際シェフの料理販売（郡山）

実施日：7/31

カレー・スパゲッティ・胡瓜の漬物を販売した。特に胡瓜の漬物が好評だった。胡瓜の漬物を担当したが、胡瓜を 4 本も折ってしまい 1 つのものを作るだけでも大変だと感じた。

となりに、派手な黄色の移動販売車がケバブを販売しており行列が出来ていた。そのような状況の中では、宣伝や呼び込みの仕方も考えなければならないと思った。

3. その他

はっちゃん→　**「若いうちは物事を多角的に見ろ！」**

オフの日・・・フィールドワークにて、福島の良さを知った。

4. まとめ

震災直後と比べて、被災者の方もそれをサポートしてきた人も心身ともに落ち着いてきた。しかしながら、現在は仮設住宅の問題など新たな問題が出てきた。周囲の状況が日々変化していく中では、当然被災者からの要望も変化してくる。それら全ての要望にこたえるのは難しいことであるが、どれが一番重要な要望かを選択して対応していくのが今後の課題であると思う。

会津若松市で経験したこと・理解したことを、少なからずいわき市でも生かせたと思う。仮設住宅においては、出来るだけ住民間の差を少なくするということが重要であると感じた。